

第1回

本学に在籍する女子学生は2万人を超えるが、卒業後研究者になる女性は極めて少ない。無論、これは本学に限ったことではない。総務省が発表した「科学技術研究調査」によると、2011年度末現在、研究者に占める女性の割合は14%。野呂教授は「インベーションの創出には、女性やさまざまな国籍の研究者などの多様な視点が必要。いろいろな考え方を生かしてこそ、新しいものが生まれる」と力説する。

野呂教授は、生産工学部で教壇に立っている。細胞工学、遺伝子工学が専門分野だ。教授の研究室に所属する学生は「とてもおおらかな先生」「自立心を育てくれる」と評して

一線で輝く女性は多い。そんな「日大なでし」たちの存在を伝えたい。

連載第1回は本学初の女性研究者支援プロジェクトに携わった生産工学部の野呂知加子教授を紹介する。

女性の視点が生きる



のろ ちかこ 1956年神奈
川県生まれ。84年京都大学大
学院理学研究科博士課程修
了。2005年本学大学院総合科
学研究科准教授。08年より現
職。

理系女子学生を増やす
理系の女性研究者の比率は極めて低い。文部科学省によると、理学、工学、農学分野で4%~7%程度だ。「理系女性研究者を増やすには、まず理系女子学生を増やす必要がある」と付属豊山女子中学、高校と共に理系選択支援活動を行った。その一環として、中学3年生と高校1年生を対象に、生物資源科学部や生産工学部といった理系学部への体験学習ツアーを実施した。2年前に生産工学部へのツアーに参加した付附属豊山女子高2年の大橋美佑さんは、「文系か理系か選択に迷っていたが、ソーシャル実験や大学生との交流の中で、理系に進みたいという気持ちが強くなった」と話す。ほかにも理工学部の教員による出張実験教などについている。

性を痛感させた経験
勤務していた理化学園で、つづいていたところだ。そこで理系女性研究者を増やすには、まず女性から相談を受け入れる。自分が女性だからと同様に直面し、働くこと

里山教授に女性在勤務していった経験を聞いていたところだ。自分も女性だからと同様に直面し、働くこと

講演会は3年間で30回。大学幹部の理解も得て、女性研究者の比率は08年の13・8%から11年には16・1%まで増えた。

日本大学新聞

発行所 日本大学新聞社
東京都千代田区九段南4-8-24
〒102-8275 電話03-5275-8144
郵便振替口座 東京6-119766
(大正10年10月15日創刊)
(毎日20日発行・6頁90円)

ホームページ
<http://www.nihon-u.ac.jp/nup/>
Eメール
nup.info.news@nihon-u.ac.jp